御伽草子を歩く

御伽草子を歩く

岡部伊都子

新潮社版

御伽草子を歩く

昭和四十八年四月二十日　印刷
昭和四十八年四月二十五日　発行

定価　五五〇円

著者　岡部伊都子

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京(03)三二六〇一一一一
振替　東京八〇八番

乱丁・落丁のものはお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社　製本・新宿加藤製本
© by Itsuko Okabe 1973 Printed in Japan

御伽草子を歩く・目次

浦嶋太郎……七
さゞれいし……二三
和泉式部……三九
一寸法師……五五
さいき……七一
木幡狐……八七
酒呑童子……一〇三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

物くさ太郎……一一九
鉢かづき……一三五
梵天国……一五一
三人法師……一六七
福富長者物語……一八三
あとがき……二〇〇

御伽草子を歩く

浦
嶋
太
郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

一月は太郎月。

太郎という名は、永遠の名だ。堂々としていてはなやかで明るい。過去をふりむく名ではなく、つねに現在の困難と闘いながら良き未来を招来する男の子のイメージがこもっている。単なる長男の意味をこえる。

ものの初め、たいそうすぐれたもの、大いなる存在を象徴する太郎という名。

日本の男の子は、まず太郎であった。「花子」は野暮だと、いまはすたれてきたようだが、おそらく太郎はこれから先もいつまでもうまれつづけることだろう。わたしたちは過去に数え切れない太郎を持った。そして、現在も、すばらしい太郎が育ちつつある。元気で強い身体、りりしくて勇気のある行動、やさしい気高い魂をもつ永遠の太郎像は、わたしたちのあこがれである。

もっとも古い太郎は、浦島太郎であろうか。幼いころから親しんだ童話の主人公。その童話のふるさとは、各地方に伝わった民話であり、「昔むかしあるところに」と話しだされる抽象的な物語であった。「……であったとさ」と終るときの、ほっとため息がでるような余韻は、はりつめてききいる幼な心の琴の余韻であった。子ども心は真剣だった。語りだされるせかいのなかに全身はいりこんでいたのである。

TVで夢を育てる子どもたちにとって、「いまは昔」のお伽話がどれほどの糧となっているか、想像のしようもない。わたしの幼い頃とはすっかりちがう映像と騒音で、小さな人たちは育っている。まして、この汚染と荒廃のただなかに無気力に生きているおとなのなかに、いったいなにがのこっているだろう。自分で自分のなかを透かしてみるように『御伽草子』を歩いてみたいと思った。

室町時代から江戸時代にかけて、誰がいつどのようにして書いたものか確としたことはわからない『御伽草子』は、三百篇をこえるという。正直いって文学的にすぐれた作品とは思えない。勧善懲悪ものやご利益もの、立身出世ものなど、いまの心には抵抗を感じるものが少なくない。だが、お伽に必要なとほうもない想像や、荒唐無稽の物語がある。そのどれも

が「われわれの先祖たち」の心の反映であり、夢のひとつであったと思いながら読んでいると、ふと、阿呆らしさがたのしくなって笑いだしてしまう。また、当時のきびしい身分制や苦しい労働が、時代の民衆にこのような物語をもたしめたものかと、はっとすることもある。

われわれの血のなかには、これら無数の先人たち、民衆自身の血が流れている。精神の水源には『御伽草子』のせかいもはいっているのだ。いかなる物語が、いかなる土地を舞台として展開するか。なぜその土地にその話が結びつけられたか、それを考えてみたくなった。

雷が鳴った。あられが降った。

「雪おこしといいますね、こんな日を」。

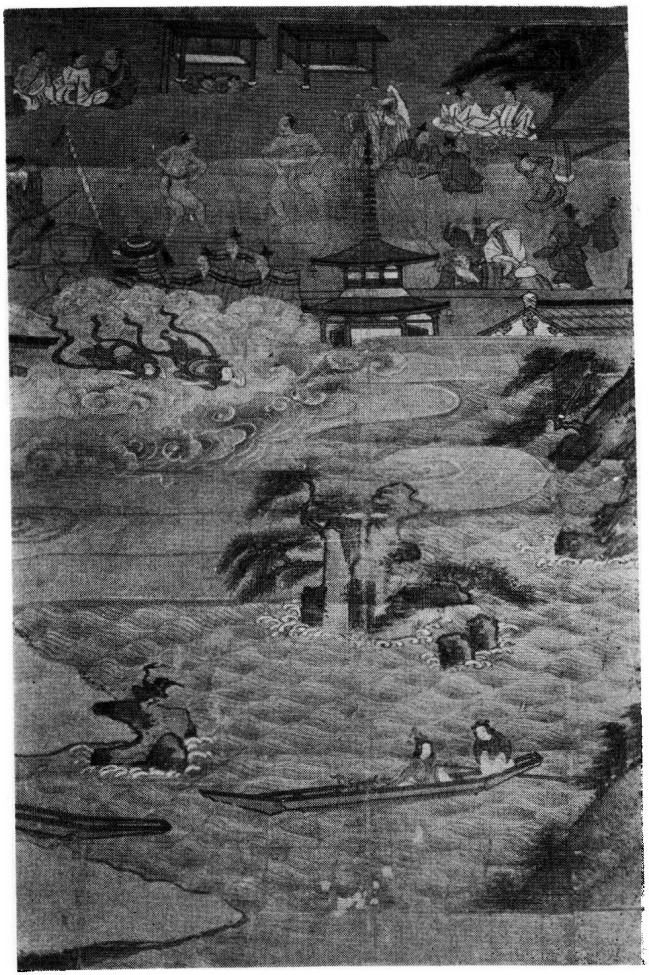
丹後ではこれからきびしい冬がはじまるさきぶれだという。京はいかにも明るい陽の光で、いったんだした雨傘も、あまり用心に過ぎると思って置いてきたくらいだった。運転手さんに頼んで、雨傘と利休下駄を求めに店によってもらう。宮津から伊根まで、北へゆくにつれて、どしゃぶりになってきた。えらい日に来てしまったものだ。わが浦島太郎が日々すなどりして過したと伝える海も浜も、茫々としている。

筒川宇良神社は、本庄の浜にほど近い。社伝によると、淳和天皇の天長二年（八二五）に浦嶋子を筒川大明神として祀ったのがはじめだという。『御伽草子』中の人物としてはめずらしく、浦島は『日本書紀』雄略天皇二十二年七月の条にその姿をあらわしている。また『丹後国風土記』の逸文に記載され、『萬葉集』巻九にも「水江の浦島の子を詠む」長歌反歌が収められている。平安朝には『浦嶋子伝』、『続浦嶋子伝』、『本朝神仙伝』、さらに『古事談』など続々と浦島伝説が発展する。

丹波国の余社郡の管川の人瑞江浦嶋子舟に乗りて釣す。遂に大亀を得たり。便に女に化為る。是に浦嶋子、感りて婦にす。相逐ひて海に入る。蓬莱山に到りて仙衆を歴り覩る。（『紀』）

『日本書紀』の完成は養老四年（七二〇）である。『丹後国風土記』は「旧の宰伊預部の馬養の連」のすでに記した浦島物語が、真にそむいていないとのべている。伊預部連馬養は文筆の才高く、持統三年（六八九）に置かれた撰善言司のひとりであった。後に丹波（丹後と丹波が分れたのは和銅六年）の国守となった人だ。

天武、持統、文武、元明、元正の各朝にまたがる四十年間ほどは、各地の伝承が意欲的に、



宇良神社蔵の絵巻

意図的に記録された。壬申の乱で多くの史書が失われている。皇権政治確立に心をくだいていた天武、持統両帝の意を体して、天皇家や顕臣たちの出自が神々によって飾られた。この丹後民話の浦嶋子は、日下部首の先祖とされる。各地方の伝承が、中央の記録にどのようにくみこまれてゆくか、なかなかおもしろい。

丹後の国の浦嶋太郎は、あけくれ魚をとって父母を養っていた。ある日亀を釣りあげたけれど、鶴は千年亀は万年という命久しいものだから「常にはこの恩を思ひ出すべし」ともとの海へかえす。翌日も海へでていると、美しい女をひとりのせた小船が近づいてきた。その女があわれげに「われらを本国に送らせ給ひてたび候へかし」というのにほだされて、十日ほどの船路でふるさとへ送っていった。

みると銀の築地をつき、金の甍を並べ門をたて、天上の住居よりもすばらしいくらいだ。女とともに暮す竜宮城の生活は、夢幻のうちに忽ち三年たってしまった。太郎はふっと父母を思いだす。かりそめにふるさとをでてきたまま、その後の父母の消息をたずねなかった。三十日ほど暇をもらって、その父母の様子を見てきたいと思う。女は自分が「助けられた亀」であることを打ち明け「開けてはならぬ」といましめながら、立派な箱を渡す。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c